

読書日記



今週の筆者は

社会学者

上野千鶴子さん

★7月8日～8月4日



■女のせりふ ■続女のせりふ (伊藤雅子著・2014年) 福音館書店
■学習としての託児——くにたち公民館保育室活動 (くにたち公民館保育室問題連絡会編・2014年) 未来社

■主婦とおんな——国立市公民館市民大学セミナーの記録 (国立市公民館市民大学セミナー編・1973年) 未来社

「主婦に思想があるか、ですって? もちろんありますよ」と——伊藤雅子さんの新刊「女のせりふ」「続女のせりふ」は「母の友」に1985年から2012年まで続いた長期連載を単行本にしたもの。その2冊同時刊行にあたって、頼まれてわたしが解説を書いた。そこから帯に採られた文章である。

1965年。日本で初の公民館託児付き講座が開設された。始めたのは、当時国立市公民館の若き職員だった伊藤さん。今でこそ、公民館や女性センターに託児があるのはあたりまえになったし、百貨店や居酒屋にさえ託児つきがあるが、その当時は「乳飲み子をかかえた女が、子どもを預けてまで学ぶなんて」わがまま、と言われかねなかった時代だ。

この学びの記録は国立市公民館市民大学セミナー編「主婦とおんな——国立市公民館市民大学セミナーの記録」として刊行されている。そのなかで伊藤さんはこう書いている。「現在主婦である女だけでなく、また主婦ではない女も、主婦にはならない女も、主婦になれない女も、主婦であった女も、主婦であることが女のあるべき姿・幸せの像であるととらえている間は、良くも悪くも主婦であることが自由ではない。少なからず

多くの女は、主婦であることとの距離で自分を測っているしなないだろうか」

「戦後思想の名著50(平井社刊、2006年)を岩崎稜、成田龍一と共に編んだとき、わたしは主張してこの本を、丸山眞男や吉本隆明などの書物ならならんで、50冊のなかに入れた。そして解説を西川祐

主婦の思想問われた半世紀

子さんに書いてもらった。わたし自身も「主婦の思想」というコラムを書いた。そう、思想は無名のひとびとのなかからも生まれる。その誕生に立ち会い、聞き取り、伴走したのが伊藤さんだった。彼女がこんな「女のせりふ」を採集する。「女には名前なんていらぬですわ」「女

わったといえるだろうか?

偶然とはいえ、時期を同じくしてくにたち公民館保育室問題連絡会編「学習としての託児」が刊行された。読んで、驚いた。40年の歴史を持つ国立公民館保育室が06年から保育室活動を支えてきた市民と公民館側との対立が原因で、危機に陥ったことがリポートしてある。「くにたち公民館保育室は、おとなの都合だけを先行させた便宜的な『子ども一時預かり所』に墮してはならない」という理念のもと、

「歴」とは考えない。その「40年の歴史が培ってきた市民の宝」も、公民館の姿勢が変質して市民との信頼関係が失われ、一時閉鎖のあと再開された保育室は、それ以前のものとは似て非なるものとなった。本書は「それはもはや『くにたち公民館保育室』ではない」とまで言う。

40年といえば、世代が交代し、経験が歴史に変わるにじゅうぶんな時間だ。本書は市民の活動が「時代を超えて伝え継がれていくこと」が、どんなに至難か、それは一瞬でも気を抜けばたちちに押しかえされ、いったん得たものすら奪われる可能性をほらむことを、わたしたちに教訓として示す。



東京都三鷹市の大沢の里水車発電所。新車(しんぐるま)近くで、徳野千鶴子撮影。

筆者は上野千鶴子、福地茂雄、西加奈子、松家仁之の4氏です。